

洗礼

呼ばれる者の声とする、「荒野に主の道を備え、さばくに、われわれの神のために、
大路をまっすぐにせよ。もろもろの谷は高くせられ、もろもろの山と丘とは低くせられ、
高底のある地は平らになり、険しい所は平地となる。こうして主の栄光があらわれ、
人は皆ともにこれを見る。これは主の口が語られたのである。」

—イザヤ 40:3—5—

慶長十五年、北条屋十三代目当主たる弥三右衛門の子、弥三郎が生まれた。北条屋は日本長崎にある代々評判の高い菓種問屋で、とりわけ弥三右衛門は勤勉で情が深く、方々に慕われているのみならず大村藩主の側近も度々やつてくるほどであった。弥三右衛門の妻ゆりは物静かで感情の発露が少なく、弥三郎を身籠った時でも生まれた時でさえもその顔を崩さなかつたといわれるが、良妻で家庭に善く努めた。弥三郎が生まれたとき、それは珠のような子だと持て囃され集落中が彼と彼の父母を祝福した。噂を聞き付けた藩校の儒学者どもがこの好事をどの教えに準えて説教しようかと三鼎で言い争った。しかし弥三郎が親から惜しみなく愛情を注がれやすく育つにつれ、周囲の者たちは段々と彼を厭わしく思うようになっていった。

実際弥三郎は変わっていた。弥三郎は二つに差し掛かる以前から歩き出し、周りのものを驚かせていたが、三つになってもほとんど喋ることはなく、泣くことすら稀だった。ただ、口をもごもごとし眼をきよろきよろさせて周囲を仰ぎ見ているだけであった。弥三右衛門はたいそう心配して方々に尋ね回ったり様々な調査の葉を与えたりしてみたが、効果は無かつた。そうかと思えば弥三郎が三回目の冬至を迎え、柚子風呂で湯浴みしている時に空を見上げながら、ちちうえ、と口から洩れた事柄を発し、途端に周りと会話するようになった。弥三右衛門は、これは何か一種の才があるのではないか、と思ひ彼を手習いに通わせてみると、忽ち読み書き算盤を覚え、書物を読み耽っては、あれは何だ、これはどうしてだ、と辺りの大人たちを質問攻めにして困らせていた。次第には北条屋にくる藩校の儒学者と小難しい問答をしているときの方が、弥三郎の目は輝いているようであった。

弥三郎が十三になる頃、彼はよく同じ夢を見た。それは果てしない一本道を歩く夢だった。何かどんよりとしたものが体に纏わりついてうまく動けないだけでなく、目鼻も覆っていて息苦しかった。ふと、無数の視線が自分の身体を貫き、肉体がじ